

青年期における母親および友人への愛着と 孤独感との関連について

浅 田 蓉 子

本研究は青年期の大学生、大学院生を対象に、母親および友人との愛着と孤独感に関連について、質問紙調査を行いその結果を検討する。愛着とは Bowlby (1969 黒田他訳 1991) が提唱した“特別な他者との情緒的な絆”のことを指す。また孤独感について落合 (1983) は“人と親密な関係をもとうとする志向性をもちながら、それが実現しないときに、人間同士の理解・共感 は難しいと感じ、自分はひとりだと感じること”と述べている。

2010 年 7 月から 9 月にかけて質問紙による調査を実施した。関西圏の大学生および大学院生の男女を対象とし 307 名 (女性 190 名、男性 117 名) の有効回答が得られた。フェイスシート (年齢と性別、学年、母親と一緒に暮らしているか、暮らしていない場合はどれくらいの頻度で連絡を取るか、自分は友人が多いと思うかについて質問した) と各質問項目から調査用紙は構成した。孤独感については落合 (1983) が作成した、孤独感の類型判別尺度 (Loneliness Scala by Ochiai : 以下 LSO) を用いた。本尺度は①人間同士共感しあえると感じ (考え) ているか否か、②人間 (自己) の個別性に気付いているか否か、という 2 つの次元で構成されている。母親と友人への愛着については Armsden & Greenbaerg (1987) が Bowlby, J. の愛着理論を基に作成した The Inventory of Parent and Peer Attachment : 以下 IPPA) を邦訳、修正して用いた。

分析の結果より次の考察が得られた。男性より女性のほうが母親、友人に対して安定した愛着を形成していることが明らかになった。さらに女性は人間同士は理解できると考え、人間の個別性に気づいている傾向が高いと言える。そして友人が多いと答えたものは友人への信頼と疎外も両方を感じており、それにより人間同士は理解できると感じていることに繋がると考えられる。だが個別性には気づいていないため、孤独を感じにくいと言える。一方、友人が多くないと答えた人は個別性に気づく傾向が比較的高いと言え、孤独感を持っていることが示唆される。

さらに友人に対しての信頼が高いこと、疎外を感じていることが孤独感のなかでも人間理解ができるという点に影響をするとと言える。男性は女性よりも母親への愛着と人間同士は理解できると考えることとの間に強い関連があることが示される。愛着が高いことは人間同士が理解できると感じることに影響を与えていることが示される。しかし、個別性については愛着が直接的な影響を与えているということは結果として示せなかった。